

# いつきの“ヒューマン・ビーイング”

## 人権について考える ③

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

### 語れる「しんどさ」と語れない「しんどさ」

わたしに転機が訪れたのは、1997年のことです。当時、同性愛について勉強したいと思い、『同性愛の基礎知識』という本を読んでいました。わたしにとって、女装や「性転換」などの情報は、「変態としての自分の側面」を思い出させるものでした。そのため、わたしは無意識のうちにそうした情報を遠ざけていました。しかし、「女性が好きになる自分は男性」と思っていた当時のわたしにとって、同性愛は自分とは関係ないものでした。本を読み進めるうちに、同性愛者の置かれた状況が、今まで自分が出会ってきた部落出身や在日朝鮮人の生徒の姿と重なっていきました。そんなふうに興味深く読んでいたのですが、あるページをめくると、突然「性自認」という見慣れない言葉とともに、以下のような解説が書かれていました。

トランス・ヴェスタイト：異性装（男装・女装）だけをしたいと思う人たちのこと。

トランス・ジェンダー：自分の生物学的「性」と違う「性」のライフスタイルを、自分に身につけようと思う人たちのこと。

トランス・セクシュアル：性転換をして、自分の生物学的「性」を変えたいと思う人たちのこと。

これらはすべて、わたしにあてはまるものでした。この箇所を読んだ瞬間、「自分は『変態』ではなくトランス・ジェンダーなんだ」と直感しました。と同時に、わたしが「当事者」になった瞬間でもありました。

自分を表現する言葉を獲得したことで、ようやくわたしは「ねじれた思い」の原因がわかり、それと向きあうことができるようになりました。しかし、一方で「当事者」であるとわかった時、わたしは「困ったな」と思いました。

わたしは、日本人の「男性」として被差別部落ではないところに健常者で生まれました。さらに、父親は大学教授で、経済的に困難さを抱えているわけでもありませんでした。つまり、わたしにはマイノリティ性が一切ないのです。わたしはそんな自分のことを「日本のWASP」と表現していました。人権教育にかかわ

りははじめた頃、わたしは自分のそういう生い立ちに引け目を感じていました。

人権教育をすすめていく上でもっとも大切にしていることのうちのひとつが「自己開示」です。互いに自分のしんどいことを語りあうことで、「しんどいのは自分だけではない」ということに気づき、さらにそのしんどさを社会化していく。「自己開示」はその出発点となります。

ところが、わたしには「しんどいこと」がありません。正確にはあるのですが、それは例えば「アメリカに留学経験がありギリシャ語やヘブライ語を教えている父親には、語学では太刀打ちできない」というしんどさでした。これはこれで、子どもの頃から感じていた、しかもなかなか他の人とは共有できないしんどさではありましたが、同時に「恵まれたしんどさ」であり「しんどさ」にカウントすることができないと思っていました。そんなわたしは、例えば、人権教育の全国大会などのレポートで「Aの生い立ちを知った時、自分の生い立ちと重なった。自分の父親もアル中で…」といった導入部があると、反発するようになりました。なぜなら、生まれによって差別されない社会をつくりだしていく人権教育のとりくみが、生まれに依拠するのはおかしいと考えたからです。わたしは「誰にでもできる人権教育」を実践しようと思いました。それは、そんなに難しいものではありませんでした。子どもたちの生活を知り、子どもたちの話をていねいに聞き、それを子どもたちに返すことで子どもたち同士をつなぐ。わたしが主役になるのではなく、子どもたちが主役になる。そんな実践の中で、部落出身や在日コリアンの生徒が、教室の中でクラスメイトに向かって自らのことを語る場面に立ち会うことができました。

このように考え、実践していたわたしは、自分が「当事者」になったことにとまどいました。しかし、「当事者」というラベルは剥がそうと思っても剥がせません。そこで、当事者であることをどのように行使すればいいかを考えるようになりました。